

事業の名称

J R水戸線岩瀬駅南地区まちづくり構想検討事業

〔事業責任者〕

(自治体側)

桜川市市長公室企画課・課長 横田 藤彦

(大学側)

茨城大学工学部・教授 金 利昭

事業テーマ：地域環境の形成
自治体との連携

連携先

茨城県桜川市

プロジェクト参加者

金 利昭 (茨城大学工学部・教授・総括)

平田 輝満 (茨城大学工学部・准教授・問題抽出)

一ノ瀬 彩 (茨城大学工学部・助教・ワークショップ指導)

大越 優介 (茨城大学工学部・学部4年生・担当学生として現地調査, ワークショップ, 取りまとめ)

他学生10名 (茨城大学工学部・学部4年生, 大学院修士1年生, 2年生・協力学生として現地調査とワークショップの補助)

横田 藤彦 (桜川市市長公室企画課・課長・総括)

近納 裕政 (桜川市市長公室企画課・現地調査, ワークショップ)

渡邊 将志 (桜川市市長公室企画課・現地調査, ワークショップ)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

桜川市では、まちの将来像を「伝統と豊かな自然に恵まれた田園文化都市 やすらぎのまち桜川」とし、超高齢化社会に対応できるまちづくりとして豊かな自然環境、農村環境、中心市街地が近接する岩瀬駅を中心としたコンパクトシティの形成も視野に入れながら、駅と里、山が近接する駅南地区の地の利を活かしたまちづくりを進める

とともに、駅の南北軸を強化することで、人にも自然にも優しい環境負荷が少ない持続可能な生活スタイルの確立を目指している。併せて、里、山、自転車道などのレクリエーション拠点を整備し、電車や自転車などを活用したエコツーリズム、エコ通勤のモデルづくりを進めたいと考えている。しかし、これに対する住民側の意向が把握されていない。

そこで、岩瀬駅の近隣住民を交えたワークショップを開催することにより住民ニーズを把握することを目的とする。



写真－1 岩瀬駅北側



写真－2 岩瀬駅南側

②連携の方法及び具体的な活動計画

大学と市が共同で下記の活動を行う。

- 1) 岩瀬駅周辺の現地調査を行い、問題点と課題を把握する。
- 2) 岩瀬駅の近隣住民を交えたワークショップを開催し、近隣住民のニーズを把握する。

上記に対する大学側の役割は、大学の知の提供、各種調査及び集計・分析に関わる学生の協力、専門的見地からの助言・提案とした。一方、市側の役割は、ワークショップ会場等の提供、ワークショップ等に使用する備品の手配及び準備、地域住民と大学の連携に必要なコーディネート、事業結果を発表する場（会場等）の提供、及び調査、ワークショップ、フィールドワーク等の支援とした。

③期待される成果

茨城大学と市が連携して本事業を実施することにより、市としては、大学の豊富な知識や学生の柔軟な発想を行政運営に活用することが可能となる。また、共同で継続的に地域に入り調査、検討を行うことで地域の実情やニーズを的確に掴むことが可能となり地域密着型の課題解決を目指すことができる。

一方で、大学としては、大学の知が地域に還元される仕組みができるとともに、実際の現場でのフィールドワーク・ワークショップ等は、学生が実社会を経験する機会や地域とつながる機会を増加させることができる。また、学生が市職員をはじめとする社会人や地域住民と共に活動することは、学生の社会参加の一助になると考えられる。さらに、学生にとっては、現場の声や生のデータを収集・分析し、その結果が地域づくりに反映される場を共有できることは、学内では経験できない貴重な経験になると考えられる。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

7月13日 現地調査（主に岩瀬駅前と観光地の状

況把握）：担当学生

7月24日 大学と市による顔合わせ：担当教員
担当学生 市企画課3名

9月13日 後の方針についての話し合い：担当学生
企画課2名

10月8日 現地調査：大学10名（教員3名、修士4名、学部3名）、市9名（企画課4名、商工観光課1名、建設課1名、都市整備課3名）

12月1日 第1回ワークショップ：大学8名（教員2名、修士2名、学部4名）、市8名（企画課3名、都市整備課2名、建設課2名、商工観光課1名）、住民15名

12月16日 第2回ワークショップ：大学8名（教員2名、修士2名、学部4名）、市8名（企画課3名、都市整備課2名、建設課2名、商工観光課1名）、住民12名

1月14日 連携事後アンケートの配布：大学15名（教員3名、修士4名、学部8名）、市8名（企画課3名、都市整備課2名、建設課2名、商工観光課1名）

2月3日 連携を振り返っての意見交換：大学（教員2名、担当学生）、市企画課2名

②プロジェクトの達成状況

二回のワークショップを実施したことによって、住民の駅前空間に対するニーズを把握することができた。具体的には、空き家を再利用することによって日常生活を充実させること、及び市側がワークショップという場で、住民と同じ目線と共に駅前空間の改善について話し合ったことによ

表-1 第1回ワークショッププログラム

1.	13:00~ (40分)	オープニング 1)市課長からの挨拶(3分) 1)担当教員からの挨拶(10分) 3)岩瀬駅前における問題・背景の説明(8分) 4)本日のプログラム説明(10分)	総合司会：市企画課 担当：企画課課長 担当：大学教員 担当：大学学生 担当：市
2.	13:40~ (80分)	意見交換 1)名札作成、自己紹介(10分) 2)意見交換(1テーブル10分×5テーブル) (移動込みで70分)	総合司会：市企画課 担当：市 担当：市
3.	15:00~ (15分)	アイスペイク(住民、意見のまとめ作業(大学・市))	
4.	15:15~ (30分)	発表(5分×5カテゴリー)(移動時間は別)	担当：テーブルリーダー
5.	15:45~ (15分)	次回の予定、参加者の感想記入	担当：市
6.	16:00~ (10分)	大学教員からの総括	担当：茨城大学教員

表-2 第1回ワークショップ役割分担

テーブルリーダー (各テーブルに1人配置し、 この人はローテーション時も動かないで固定)	交通：修士1年 拠点：修士1年 空間：都市整備課、学部3年 外部：商工観光課、学部3年 自由表記：学部4年
グループリーダー (ファシリテーターを担当し、各グループのリーダーとしてメンバーの意見を出させる、まとめる役割)	担当：市職員

表-3 第2回ワークショッププログラム

1.	13:00~ (40分)	オープニング 1)市課長からの挨拶 2)前回ワークショップまとめ 3)専門家からの知見 4)他市事例等について 5)学生の視点から見た駅前空間 6)ワークショップの説明と休憩	総合司会：市企画課 担当：企画課長 担当：市 担当：大学教員 担当：大学教員 担当：担当学生 担当：市
2.	13:50~ (60分)	意見交換	
3.	14:50~ (20分)	休憩(住民、意見のまとめ作業(大学・市))	
4.	15:10~ (25分)	発表(5分×5行政区)	担当：テーブルリーダー
5.	15:35~ (10分)	大学教員からの講評	担当：大学教員
6.	15:45~ (10分)	今後の予定	担当：市

表-4 第2回ワークショップ役割分担

(大学担当)	<ul style="list-style-type: none"> ・教員、学生それぞれが担当する発表用のプレゼン資料の作成 ・ボイスレコーダー、デジカメ、ビデオ ・航空写真 ・ポストイット、マーカー
(市担当)	<ul style="list-style-type: none"> ・A1~A2サイズの駅前空間の地図(イラストに近いもの) ・当日のアジェンダ内容(会議名、日時、場所、求められる会議の成果、参加メンバーと役割分担、進行スケジュール)、当日の議論内容を模造紙で作成 ・お茶菓子、BGM、名札用の紙 ・マイク、パソコン、プロジェクター、スクリーン、延長コード

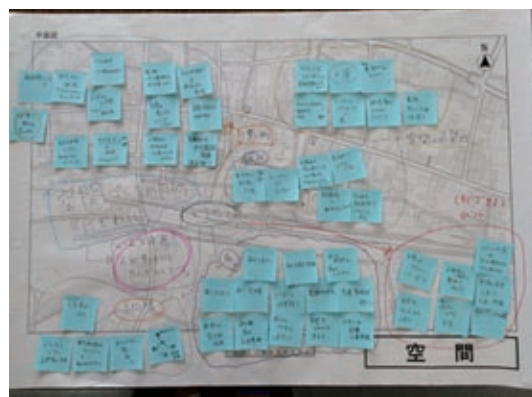
り参加住民に駅前改善に対して以前より主体性を持たせることができた。また、住民に対して自治体がまちの改善に真剣に取り組んでいるという姿勢を見せることができ、今後の街づくりに対して信頼関係を築くことができた。加えて、多数の学生が加わったことで、住民が楽しくワークショップに参加でき、ワークショップの有効性や参加することの重要性を理解してもらうことができた。これらの成果から、今回の地域連携でまちづくり構想検討のための下準備ができたと言え、プロジェクトの目標は達成できたと考える。



写真－5 大学教員による講義



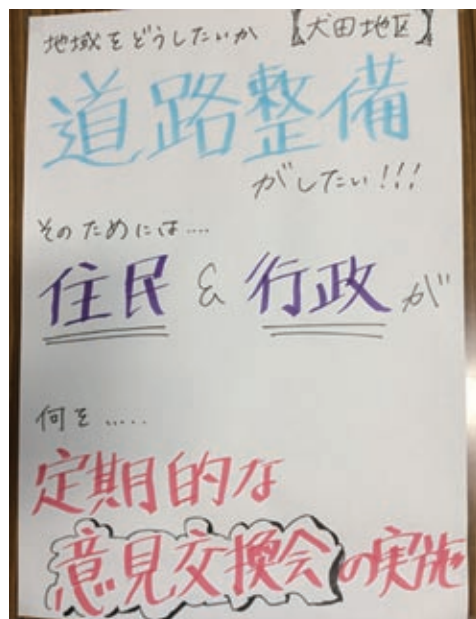
写真－3 ワークショップ風景



写真－6 第1回ワークショップでの成果



写真－4 学生の発表風景



写真－7 第2回ワークショップでの成果

③今後の計画と課題

まちづくり構想の検討という目的を大きく設定した地域連携は1年では不可能であり、当然複数年の継続した連携が必要となる。しかしながら、大学側には複数年に亘る同一学生の参加や後任学生の確保が難しいといった問題があり、学生指導を毎年ゼロからやり直すことは、大学と市の両者にとって負担が大きい。

また、今回の地域連携で挙げた成果は、主に現地調査やワークショップといった担当学生以外

の協力学生が多数参加することによって得られたものである。この場合、協力学生の授業時間や研究との日程調整が難しく、また休日の開催となることが多いため、協力学生を安定的に確保できるかは不透明な状況である。したがって、ここでも多数の学生を継続的に確保できるのかが問題となる。このため、現時点では学生は複数年継続的に取り組みにくい状況であり、プロジェクトの効率的・安定的推進には多くの問題があると考えられる。